
LUCK - 9999

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L U C K - 9 9 9 9

【Nコード】

N 8 1 2 8 W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

現実から逃げて死んだ俺は何と、廃人になる程やり込んでいたゲームの世界に転生できた。

何だよ、神様も俺のことを見捨てていないじゃないか。

そう安心したのもつかの間、異質な数値とオートスキルに俺は目を瞬かせる。

L U C - 9 9 9 9 なんだこれは？

そして特定の行動によってLUCが変動というオートスキルも意味

が分からない。

あ、目の前でお姉さんが転んだ。
気まぐれで助けよう。

ピローン

『困っている人を助けた L U C + 1 』

ああ、そういうことか。

善行を積みと神様は言いたいのだな。

幸いにもステータスは最強だから何とかなるだろう。
さてと、始めるか。

各種設定（前書き）

M M O R P G を全くプレイしたことの無い作者が作った設定です。
もしベテランの方が見てくれたのなら何かアドバイスをお願いします。

各種設定

ステータス説明

HP……これは文字通りプレイヤーの生命力を表し、ゼロになれば死ぬ。

MP……魔法や技を使うのに必要な値。

VIT……強力な攻撃や長時間の錬成などの行動によって減少する幅が大きくなり、ゼロになると死ぬ。

STR……杖や剣など物理攻撃で相手にダメージを与える際に影響する。

DEF……敵から攻撃を受けた際ダメージ算出に影響する。

INT……物理的ダメージ以外のダメージを与える際に影響する。

MND……魔法ダメージや異常効果などを受けた際に影響する。

AGI……命中率や回避などに影響する。

LUCが影響するのはあくまで戦闘や調合といったアクションのみ。日常生活において運が悪くなるということではない。

ちなみにLUCは、魔物とのエンカウトや会心一撃また痛恨ダメージや攻撃の命中・回避。魔物によるドロップアイテムそして鍛冶や調合の成否に係している。

称号設定

剣使い 剣が装備できる

魔法使い 魔法が使える

剣士 レベル11以上 剣使い

ソルジャー レベル11以上 剣使い

戦士 レベル11以上 剣使い

弓使い レベル11以上 剣使い

魔道士 レベル11以上 魔法使い

クレリック レベル11以上 魔法使い

道化士 レベル11以上 魔法使い

シャーマン レベル11以上 魔法使い

ソードマスター レベル31以上 剣士

サムライ レベル31以上 剣士

ハルバーディア レベル31以上 ソルジャー

騎士 レベル31以上 ソルジャー

ウォーリア レベル31以上 戦士

山賊 レベル31以上 戦士

アーチャー レベル31以上 弓使い

狩人 レベル31以上 弓使い

魔法剣士 レベル31以上 魔道士

魔術師 レベル31以上 魔道士

プリースト レベル31以上 クレリック

トルバドル レベル31以上 クレリック

幻術師 レベル31以上 道化士

錬金術師 レベル31以上 道化士

ドルイド レベル31以上 シャーマン

ネクロマンサー レベル31以上 シャーマン

剣聖 レベル61以上 ソードマスター

勇者 レベル61以上 ソードマスター

剣豪	レベル61以上	サムライ
斬鬼	レベル61以上	サムライ
ジェネラル	レベル61以上	ハルバーディア
槍神	レベル61以上	ハルバーディア
宮廷騎士	レベル61以上	騎士
ドラゴンナイト	レベル61以上	騎士
グレートナイト	レベル61以上	ウォーリア
英雄	レベル61以上	ウォーリア
バーサーカー	レベル61以上	山賊
破壊神	レベル61以上	山賊
スナイパー	レベル61以上	アーチャー
フォレストナイト	レベル61以上	アーチャー
アサシン	レベル61以上	狩人
ニンジャ	レベル61以上	狩人
魔法騎士	レベル61以上	魔法剣士

暗黒騎士 レベル 61 以上 魔法剣士

賢者 レベル 61 以上 魔術師

大魔導師 レベル 61 以上 魔術師 二重詠唱可能

ビショップ レベル 61 以上 プリースト

暗黒神官 レベル 61 以上 プリースト

ヴァルキュリア レベル 61 以上 トルバドール

パラディン レベル 61 以上 トルバドール

イリユージョニスト レベル 61 以上 幻術師

ジョーカー レベル 61 以上 幻術師

魔械術師 レベル 61 以上 錬金術師

マッドサイエンティスト レベル 61 以上 錬金術師

暗黒神 レベル 61 以上 ドルイド

魔皇帝 レベル 61 以上 ドルイド

召喚術師 レベル 61 以上 ネクロマンサー

リッチ レベル 61 以上 ネクロマンサー

人物設定（前書き）

すでに出てきた設定、そしてまだ出てきていない裏設定もあります。
これはちよくちよく更新すると思います。

人物設定

コウイチ「タカハラ

種族 人間

17歳（元35歳）

本編の主人公。

打算的に物事を考える。

最強、おそらく国家相手でも普通に戦える。

LUCC - 9999という神に見放された運だが、コウイチはそれを前の世界で自殺した業が原因と考えているので嘆くことなく受け入れている。

最悪の状況を想定し、常に大量のアイテムを持ち歩いて動くので周りから「どうしてそんなの持ってるの？」と驚かれることもしばしば。足りない運を豊富な経験で補って日常生活を送っている。

始まり

この世に絶望して自殺。

それはよくある話だ。

何せ俺の時代には電腦世界と現実世界との境界が無くなったのだから。

科学技術の発達によって、人類はファンタジーの世界に入れるようになった。

昔ならキャラクターが画面の向こうで動くのをただ眺めるしか出来なかったが。

今ではそれが画面の中でも動くことが出来る。

現実と空想が曖昧。

だからこそ、現実で失敗した奴らは空想に逃げ込んで安住の地を得る。

そしてついには俺のように死んでしまう。

「……イースペリア大陸物語の中に行きたいな」

大量の睡眠薬に意識が急速に薄れゆく中。

俺は廃人になる程やりこんだMMORPGのことを考えた。

気が付いたら俺は薄汚い路上で寝転んでいた。

「……ここはどこだ」

俺は自分の部屋のベッドにいたはずなのだが、いつの間にかこんな場所にいる。

ペタペタと自分の顔を触ってみると、普段より少し肌のつやがある。

体の軽快さからおそらく今の俺は17歳の頃の時分だろう。

そして俺は周りを見渡す。

敷き詰められた石畳み。行きかう人々はスーツや洒落た服でなく、ファンタジーで登場するあの古風のある服。そして極めつけは耳の尖った人や猫耳など明らかに人じゃないのが混じっている。

「まさか、ここは」

俺は内から湧き出てくる興奮を押さえながら左手の人差し指と中指を合わせた。

思った通り、本人以外見えない透明なウィンドウが出現する。

これは本人しか確認できなく、どれだけ親しくとも他人はステ-

タスを見ることができないのだ。

確信した。

これはゲームの中だ。

しかも俺が愛してやまないイースペリア大陸物語というゲームの世界。

なんだよ。

神様もいいところがあるじゃないか。

現実に絶望した俺にこんな舞台を与えてくれるとは。

始めにイースペリア大陸物語というのは、イースペリア大陸を舞台としたゲームで、エルフや獣人などの亜人や魔法も登場する王道のファンタジー系だ。

しかし、どうしてそれが大人気になったのかというと既存のゲームを超えたリアルティックによって人気を博した。

他のゲームと一線を画すリアリティにも関わらずファンタジーを両立させ、例え画面の向こう側で知っていてもそのグラフィックの華麗さに目を細めてしまう。

そして、俺はそのゲームを廃人になるほどやり込んでいた。

ある時は他のプレイヤーと冒険に出かけ、ある時はソロでクエストを行っていた。またある時もアイテム作りや町興しなどイースペ

リア大陸物語でできる操作はあらかたやり尽くしたと思う。

そして、そんな俺が心血を注いだといっても過言ではないほど愛したゲームの世界に行けたとなるとこれはもう喜ぶしかないだろう。

が、そんなウキウキした感情もステータスを見て不可解な数値に目を細める。

俺のゲーム内でのステータス

名前		コウイチ・タカハラ
種族	人間	
クラス	大魔導師	二重詠唱可能
レベル	85	
装備	武器	アレイスターの杖
	防具	古代のローブ
	腕	トワイライトの指輪
	足	ルナティスのブーツ
	装飾品	転生の宝玉
		即死無効
		あらゆる場所を歩ける
		戦闘中一度だけ蘇れる

ステータス

HP	2045
MP	5071
VIT	969
STR	456
DEF	459
INT	1624

MND 1051
AGL 687
LUC -9999

オートスキル

LUC 変動

名前や装備はいつも通り。

HP……これは文字通りプレイヤーの生命力を表し、ゼロになれば死ぬ。

MP……魔法や技を使うのに必要な値。

VIT……強力な攻撃や長時間の錬成などの行動によって減少する幅が大きくなり、ゼロになると死ぬ。

STR……杖や剣など物理攻撃で相手にダメージを与える際に影響する。

DEF……敵から攻撃を受けた際ダメージ算出に影響する。

INT……物理的ダメージ以外のダメージを与える際に影響する。

MND……魔法ダメージや異常効果などを受けた際に影響する。

AGI……命中率や回避などに影響する。

LUK……クリティカルや錬成・調合の成否に関係する

「……これは」

そついったステータスよりも俺はLUCが-9999という最悪

の数値が気になる。

「ただ、攻撃魔法系である俺にとってはあまり意味がないな」

クリティカルが関係するのは物理系の職種であり、さらに俺は錬金士ではないから錬成や調合なども一切行わない、が。

「つまらん」

俺にとってイースペリア大陸のゲームはほぼ制覇したのも同然。

すでに分かり切っているイベントやクエストをこなすのは面倒くさい。

「なら最強を目指す方向はなしということ」

そう結論付けた俺は次に見慣れないオートスキルに目を向ける。

LUC 変動 特定の行動を取るとLUCが変動する。

「特定の行動？」

俺は特定の行動とは何を指すのか分からずに首を傾げる。

俺は結構このゲームをやり込んだが、こんな特殊なオートスキルなど攻略ページにも載っていなかった。

「あ、誰かがこけた」

不意に俺が見ている前で買い物をしていたネコの亜人のお姉さん

が転んだ。

必然的に慣性の法則で買っていたものが辺りにぶちまけられる。

「まあ、何かの縁だ。拾おうか」

ネコの亜人のお姉さんが必死に集めているのをただ傍観するほど俺は悪人じゃなかった。

「手伝いますよ」

俺はそう断ってネコの亜人のお姉さんと一緒に落としたものを拾い始めた。

「これで全部かな」

最後の1つを渡した俺は一息を吐く。

拾い集める行動事態は簡単だったが、結構広範囲に広がっていたのでそれを集めるのに手間取った。

「あの、ありがとうございます。これ、お礼です」

全てを拾い終えて猫の亜人のお姉さんに手渡すと、お礼の印としてその果物を一個渡してくれる。

そしてそのまま猫の亜人さんのお姉さんは雑踏の中へと消えていった。

ピローン

「ん？」

電子音が響いて俺の目の前にウィンドウが表示される。

『困っている人を助けた L U C + 1』

「ああ、そういうことか」

俺は特定の行動が何を指すのか理解した。

褒められる行為、つまり善行を行うとLUCが上昇するオートスキルらしい。

「なるほどね、これが神様が俺に与えた試練か」

自殺という大業を犯した罪を償うには多くの善行を積みめと。

「ま、分かりやすくいいな」

最強の力を手に入れたものの、この世界でどう生きていこうか目標が無かったんだ。

ステータスも最高クラスであり、イベントも分かり切っているから必死になってやる必要もない。

ならば善行を積んで最悪の状態であるLUCを最高値に上げることを目標にしていいかもしれない。

そして、LUCを元に戻した後には本格的な冒険と移る。

うん、いいんじゃない。

「よし、そうと決まれば行動開始だ」

目指せ、LUC 9999！

クソガキ

「はてさて……どうしたものかな」

手に持った果実 リンゴを掌で弄びながらこれからの予定について考える。

ＬＵＣを上げるために善行を積むという目標は決まった。

「しかし、どうやって善行を積む？」

てっとり早いのは何かを生み出してそれを供給することなのだが、残念ながら俺はそちらに関してはド素人というか触れたこともない。

「いつも画面の外から見てきた俺に突然何かを作れと言われても不可能だな」

料理すら作れなかった俺が薬を作成できるはずがない。

しかも、例え作れたとしてもＬＵＣは最悪値。

奇跡が起こっても無理だろう。

「さて、どうし」

と、そこまで考えた瞬間手に持っていた果実がパツと消えた。

驚いて辺りを見回すと、羽音を出しながら俺から遠ざかっている鳥の亜人が一人。

あの漆黒の羽模様から、おそらく鴉だな。

向こうは空に逃げたことで安心しているのだろう。

俺の方を向いて舌を出す。

どうやらまだ10歳程度の子供らしい。

あどけない顔に、不釣り合いな大きな羽を持っている。

「さてさて、これは少しお仕置きをしないといけないな」

トントンとルナティスのブーツのつま先を蹴る。

これは移動不可能な場所　水の上やマグマは勿論のこと、何と空まで歩くことが出来る逸品だ。

これを手に入れるに相当苦労したな。

何せ廃人である俺でさえ3回もクエストに失敗したんだ。

かなり屈辱だったが、誰にも取られることも無く、手に入れられてホッとした記憶がある。

鴉の少年が驚きの表情を作る。

いいねえ、それ。

ありえないとでかでかと顔に書いてあるなあ。

「さて、鬼ごっこの始まりだ」

鴉の少年が加速したのを合図にし、空中鬼ごっこが始まった。

「……まだ捕まらないか」

俺は鴉の少年を追いかけてながらそんなことを呟く。

体は17歳のため体力的には問題ないが、たかが果実一個でここまで労力を使う必要があるのかと俺は考え始めた。

これ以上時間をかけても仕方ないので俺は杖を取り出して詠唱を始める。

詠唱のため足が止まり、鴉の少年との距離がどんどん広がっていったがそれは仕方ないだろう。

「雷よ、敵を貫け　サンダー」

杖の先から電流が迸って鴉の少年を打ち貫いた。

突然の出来事に鴉の少年は驚愕の表情を浮かべ、そして痺れる体を必死に動かそうとしながら落下していった。

「まあ、死にはしないだろ」

幸か不幸かここは湖の上空。

地面と違って怪我はしないだろうな。

と、俺はそこまで考えたが、重大な事実に気付く。

「麻痺状態に水って不味くないか？」

案の定、鴉の少年は沈んだまま浮かんでこない。

俺は血相を変えて水に飛び込み、鴉の少年を救出したのは言っても無いだろう。

「何で人間のくせに飛べるんだよ！ それに魔法なんて卑怯だろ！」
ずぶ濡れになったままの鴉の少年はそう言って俺を責めてくる。

「おいおい、何で俺が怒られるんだよ。そもそもお前が俺から果実を取らなければこんな事態にならなかっただろ」

「煩い！ おかげで果実も湖の中に落としたから弁償しろ！」

「はあ？ どうして俺が弁償するんだ。あれは元々俺のだろう」

「俺が最後に持っていたから俺のだ！」

無茶苦茶な理屈である。

そのあまりの開き直りの良さに呆れを通り越して感心していた俺

がそこにいた。

「……クシユン！」

ギャーギャー喚いていた鴉の少年が吹いてきた風によって震え、くしゃみをする。

そう言えば俺もクソガキもずぶ濡れだったな。

季節は初夏だから大丈夫かもしれないが、早い所乾かしておきたい。

「おい、クソガキ。お前の住んでいる所に連れて行け」

「クソガキじゃない！ アロウだ！ そして、どうして俺がお前なんかを家に案内しなきゃならないんだよ！」

……本当に子供というのは凄いなあ。

俺にできないことを平然とやってのけてやる。

「分かったよ、この事は犬に噛まれたとして忘れることにする」

アロウの無鉄砲さに敬意を表してここは引き下がろう。

それはともかく、このままアロウを帰らせるのも何だったので俺は懷から金貨を取り出して渡す。

「き、金貨！？」

アロウが驚くのも無理はないだろう。

金貨はそれ一枚で大人一人が1ヶ月ほどゆうに遊んで暮らせるほどの金額だ。

ちなみに俺は金貨だけで軽く1万枚は持っている。

どうしてそんなに持っているのかというと。

「金つてある一線を越えると不要なものになり下がるからなあ」

中級までのプレイヤーはともかく、俺ぐらいの域になると装備は全て非売品で固めることになるので金は指数関数的に増加していく。

もちろんカジノで消費するのも手だったが、俺はそれを全く使用しなかったので今に至っている。

「それじゃあな、クソガキ。風邪をひくなよ」

俺も濡れてしまったから早い所乾かさなければならぬ。

だから俺は踵を返して立ち去ろうとしたのだが。

「待ってくれ！」

「へブッ！」

アロウは俺のロープを引っ張りやがった。

「イタタ……おいクソガキ。何のつもりだ？」

痛む鼻を抑えてそう文句を垂れようとしたのだが。

「俺の家に案内する！ だからこつちだ！」

アロウは全く耳も貸さずに俺の両脇を持って連れて行くところの
のだが。

「おいおい、子供のお前に大人1人持ち上がるはずがないだろう」

アロウは必死に羽ばたかせているが、180cmある俺の体はピ
クリとも動かない。

「おい、クソガキ。一体どうしたんだ？」

いきなり俺から果実を奪ったことといい、それを落として突つか
るといい、行動に一貫性が見えない。

「妹が……俺の妹が助かるかもしれないんだ」

顔を真っ赤にしながら羽ばたかせてそう漏らすアロウの様子から
おそらく嘘ではないだろう。

もし嘘なら大した役者だけだな。

「分かった、お前の妹の元へ向かうから一旦下ろせ」

必死に努力が叶ったのか俺の体は10cmほど浮いていた。

「ホントか!？」

ニパツと笑うのは勝手だが突然離すな、驚いたぞ。

「ああ、本当だ。俺に嘘はつかない」

アロウの妹を救えばLUCKも手に入れられるだろうしな。

と、俺はそんな打算も胸にアロウと共に空を飛んでいった。

少年の決意

「ここが俺の家だ」

アロウの案内の元その妹やらがいる場所に辿り着いたのはいいが、俺はこれが家と言えるのか戸惑っている。

まずここまで来るまで驚きだった。

一軒家が立ち並ぶ場所を抜け、集合住宅が立ち並ぶ場所も素通り。段々とゴミやら浮浪者が道端に現れ始めた通りを抜けた場所にアロウの掘立小屋　家があった。

「お前は貧民街出身なのだな」

レンガはあちこちひび割れ、窓は吹きさらし。

家の中もゴチャゴチャとガラクタが積まれてそこから悪臭を放っていた。

「俺は子供だからな。出来ることなんてたかが知れている」

悔しそうに呟く様子から、この状況を快く思っていないのだろう。

「まあ、アロウの過去については後で聞くとしてとりあえずその妹やらはどこにいる？」

「そこのベッドだ」

虫食いだらけの毛布で作られていたが、そこだけは綺麗にしようと頑張ったのだろう。他の場所と比べて幾分か整えられていた。

そして俺はベッドに近づき、そこに眠っている少女を見た感想は。

「おお、これは」

本物というのはどんな環境に置かれてもその輝きを色褪せない、そんな事実を確信するしてしまうほど美しかった。

「妹のハクアだ、鷲の血を色濃く受け継いでいる」

栄養状態が悪く、身もあまり綺麗にしていないのだろう。少々肌や翼が黒ずんでいるが、それでも美しいと感じてしまう。

病的なほど白い肌と純白の羽の持ち主が横たわっている姿というのはどこかこう、静謐な空気に包まれるな。

「…………お兄ちゃん？」

俺が近づいたことでハクアが目を覚めたのだろう。

澄み切った碧い瞳を俺に向けながら弱弱しい声音でそう絞り出す。

「いや、俺はアロウの…………お兄さんと浅からぬ因縁がある者だ」

果物を盗まれたので追いかけた仲だということはできないので曖昧にごまかした。

「お兄さんが君を看て欲しいと頼まれたので来たわけだ」

「……そう。ありがとう」

儚く微笑む様子から、俺はハクアを救いたいという感情が出てくる。

なるほどな、あのクソガキが必死になるわけだ。

こんな微笑みを浮かべられたら男なら誰だって何とかしたいと思うだろう。

そして俺は一通り受け答えをし終え、アロウと話す。

「第一にこの環境が悪い。清潔な部屋と栄養価値が高い食事を施さなければ何とも言えない」

ハクアの病については詳しくわからなかったが、とりあえずこの環境を改善することが第一だと伝える。

「まあ、とにかくここを出ることだ。幸いにも金はあるからもっと良い場所で療養させよう」

俺の提案にアロウは頷く。

「そして、気になっていたのだが、お前とハクアは兄妹でないだろう。いくら偶然というものがあってもあんな見事な白を出せるとは思えない」

アロウはカラスの亜人だが、よく見ると鳩や雀の色も僅かに確認

できる。

身なりや性格からアロウは雑種だということは疑いないのだが、ハクアは別。

あれは純潔でないとの神々しい雰囲気は出せないと睨んでいるのだが。

「俺とハクアは兄妹だ！」

が、アロウはムキになって否定する。

その必死な様子から俺はこれ以上聞いても無駄だと判断して次の質問に移った。

「まあ、それは良い。しかし、お前らはここに来て浅いだろ。鷺の亜人は希少の上、あそこまで見事な白はそういない。下手すれば金貨100枚は下らないと思う」

「……」

「それも答えてくれないか……」

アロウは黙秘し、意地でも喋らないという決意が浮かんでいたの
で俺は追及を諦めた。

「そんなに話したくないのなら俺からはもうこれ以上聞かない。ただ、土壇場になってから真実を話すのは止めてくれよ。『実はハクアは鳥人の中で名誉ある血統でした』なんて言われても俺は助けられない」

下手すれば俺は重罪人としてしょっ引かれてしまう。

さすがにそれはごめんだった。

「……分かった」

アロウが了解したのを確認した俺は一つ頷き、ハクアの体を毛布で包んでアロウとともに外へ出た。

そして俺は記憶を引っ張り出して宿屋の中でも最高級の場所を選ぶ。

高い宿というのはプライバシーがしっかりしているから純白のハクアを衆人に見せる機会が減るし、従業員も追及してこないだろう。

「……広い」

アロウは案内された部屋の広さに呆然とする。

「さすがスイートルーム。下手すれば家の一軒は収まりそうだな」

部屋は4つもあるのだがそれを圧迫感を与えない計算された作りになっており、床前面に踝まで埋まりそうな絨毯が敷いてある。ベッドを押してみると、どこまで沈んでいきそうな柔らかさを持っている。

「これだけ広いのだったらハクアとアロウはベッドを使え。俺はソ

ファで良い」

「え？ お前はベッドで寝ないのか？」

ベッドの感触を楽しんでいたアロウが起き上がって信じられないといった風に聞いてきたので俺は手を振って。

「高級すぎて落ち着かん。それにハクアはお前と一緒に寝たいようだ」

俺の指摘にアロウがハクアを見ることと、横になっていたハクアが顔を逸らすのは同じだった。

「そういうことだ。さて、俺は食料と薬を宿屋のオーナーから取りに行ってくるからそれまで大人しくしておけよ」

アロウとハクアが何とも言えない微妙な空気を作り出している中、俺はそう言い残して部屋を出て行った。

俺がいない間に何か解決したのだろう。

2人とも顔が赤い。

そして俺は運んできた料理をテーブルに並べて3人で早めの夕食を始めた。

アロウは何でも食べるらしく、勢いよく料理を頼張るのに対し、ハクアは果物しか取らない。

まあ、鷺はその性質上肉や魚を食べられないからな。仕方ないといえは仕方ないか

今度、栄養価の高い果物を買ってこようと俺は心に決める。

「さてと、これからの予定だが、いつまでもこんな生活はできない。そこは理解しているな？」

食事を取り終えた俺は2人に聞く。

「ハクアは仕方ないとしても、アロウは動けるだろう。だから俺はアロウを冒険者にしたいのだが構わないか」

冒険者というのは大都市に配置されたツール神殿の神託によって『剣使い』か『魔法使い』かを選択することができる。

もちろん誰にでもなれるわけではない。

冒険者になるには専門の学校を出るか、または試練をクリアすることによってなることができた。

「お兄ちゃんが冒険者……」

ハクアが渋い顔を作るのはわかるだろう。

何せ冒険者というのはその性質上、最も死亡率が高い。

ハクアからすればアロウに万が一のことがあることを恐れていた。

「……やるよ」

が、対称的に本人であるアロウは乗り気だ。

「このままじゃ駄目だということは分かっている。今の俺じゃハクアを守ることができない。だから俺、冒険者になるよ」

アロウの決意は相当固いらしい。

瞳に全く揺れがない。

「そうか、それなら善は急げだ。明日にもその神殿に行くぞ」

俺の宣言にアロウは炎を燃え上がらせる。

「……そうですか、お兄ちゃんがその気なら私だって」

「うん？」

ハクアが何かを呟いた気がするが残念ながら俺には聞こえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8128w/>

LUCK - 9999

2011年12月25日12時42分発行